

『放射線治療の進歩と正しい選択のあり方』

山下 孝 癌研有明病院副院長、同放射線治療科部長、NPO法人TeamNET理事
やました たかし

講演者 Profile



1970年、京都府立医科大学医学部
卒業。東京女子医科大学放射線科の
研修医、東京慈恵会医科大学放射線
科助手、講師、
1978年、米国ハーバード大学へ留学。
1986年、財団法人癌研究会附属病院

1988年、放射線治療科部長。現在は癌
研有明病院副院長・放射線科治療部長
および東京慈恵会医科大学附属病院客
員教授。NPO法人TeamNET理事、がん相
談“蕩蕩”相談医。

講演概要

1. 進化する放射線治療

これまで、放射線治療は周辺の正常組織を損傷してしまうことが問題でしたが、近年、コンピューターの進歩に伴い、正確に狙ったがん細胞に照射ができるようになりました。現在、日本では25%の患者さんが放射線治療を受けていますが、アメリカでは60%を超えており、今後日本でもますます増えることが予想されます。

一方、一般的に医師は自分の専門分野以外の情報をほとんど持っておらず、放射線治療についても正しい情報を提供してくれる医師はほとんどいません。今は、インターネット上で米国国立がん研究所が世界的ながんの標準治療について情報提供をしています。こうしたサイトを利用し、積極的にご自身の治療法について調べるのも賢い手段といえるでしょう。

2. 副作用が減り体に優しい治療に

放射線治療の原理について簡単に説明すると、放射線は体を貫通し、深部のがん細胞に到達することで細胞のDNAを殺し、細胞を死滅させます。

放射線治療というどうしても副作用が気になります。確かに昔は5～10分かけて照射していたため、血液中の白血球の減少が問題となっていました。ところが、今は1分程度しか照射しないため、白血球はほとんど減少せず、さらに照射機器の進歩によりピンポイントでがん細胞に照射できるようになったため、副作用も減ってきています。このように、放射線治療は体に優しい治療法になってきているのです。

3. 手術に劣らない治療成績も

現在、外部照射方法がどこまで進歩しているかということ、最近ではIMRTという、コンピューター制御によって、治療したい部分だけに放射線を集中して当てる放射線治療が行われるようになりました。

前立腺の照射については、直腸の線量を減らし、いかに傷つけないかが問題でしたが、IMRTによって、直腸に当てずにピンポイントで照射することが可能になり、副作用を回避することができるようになったのです。なお、どれぐらいの線量をどう当てるかについては、非常に複雑な計算が必要になりますが、数年前まではコンピューターでさえ1週間かかっていたのが、今では30分で計算できるようになりました。

興味深いことに、アメリカで前立腺がんに対して手術と放射線治療の非再発率を比較したところ、放射線治療の線量をあげることで、手術よりも成績がよくなったという結果も出ています。

今では小さいがんであれば放射線治療で治る時代になり、肺がんや食道がんも、抗がん剤との併用で手術に劣らない成績をあげています。また、緩和医療にも放射線治療が用いられるようになるなど、放射線治療はより一般的ながん治療として、急速に定着してきているのです。

“蕩蕩”がんセミナー(2008年6月28日)より抄録作成

主催:NPO・TeamNET(東京地域チーム医療推進協議会)
共催:がん相談・“蕩蕩”他 <http://www.teamnet.or.jp>